

(1) 科学研究者をとりまく諸状況とその克服への道

科学研究者をとりまく諸状況とその克服への道

岩 崎 允 胤

1

今日、インフレ、公害問題などをはじめ、じつにたくさんさんの深刻な問題がわれわれの日々の生活を脅しているのは、周知のとおりである。学校教育にかんしても、中教審答申や、筑波大学の設置などにみられるように、反民主主義的な教育体制を当局は推進している。科学・技術の面でも、たとえば、資本にとってもうけになるような特別の研究領域にはいわゆる科学・技術投資として多額の研究費が出される一方で、基礎科学や文系の諸学科には金あまり出されない、という非常にゆがんだ方針がとられている。そうしたなかで、研究者は、えてして、

自分の小さな講座なり研究室のなかにのめりこんでしまい、個人主義的ともいえる競争の傾向も、ごく一部のあいだだろうけれども、みられないわけではない。こうして、研究者における思想性の欠如とか、相互連帯性の寸断という現象も生じている。たとえば、大学の紛争のさいにも、自分の研究室が封鎖されなければ紛争は自分には無縁なことであり、自然科学者というものは、どんなときでも、好きな実験がやればそれで満足なのだ、というような見解もだされたりしている。

とにかく、われわれ大学内外の研究者をとりまく状況は、最高利潤の獲得をめざし国民の生活を収奪して太ってゆくという資本の要求を背景にしてつくりだされ、お

しだされる科学・技術政策のまっただなかに、まるごとつつみこまれている、といってもいいほどである。そのなかで、資本家階級に都合のいいかたちで、科学研究者が育てられ、科学の成果が利用されている。

そこで、科学の階級性というものを考えてみたい。まず、残念ながら、わが国の体制のもとでは、科学的研究それ自身が構成体的特性——構成体とは、史的唯物論の用語での経済的社会構成体を意味しており、現在でいえば資本主義的な経済体制をいう——を、いやおうなしに刻印づけられていることを、指摘しなければならぬ。そのために、科学の進んでゆく基本的方向はもちろんのこと、どういう研究をするかという研究課題の設定、また、なにをめざすかという研究目標の設定、などが、意識的にせよ、無意識的にせよ、外的にきめられてくることになる。放っておけば、科学者個人が自分で考えてこしたことを定めるといふ自由は、結局はなくて、政府なり支配階級なりの求めるような基本的な路線におおはばにだきこまれたかたちで、研究の基本方向、研究の設定や目標の設定などが外的にきめられてくる状況にあるといえよう。とくにこのことは自然科学系で著しい。

そこからまた、科学の発展も資本によって規定されてくる。つまり、科学・技術投資というかたちで、特定のもうけの見込まれる領域に多額の研究費が出されるから、そういういわば目玉商品的な、ハイライトを浴びた分野が、どうしても、かたわなかたちで発展することになる。だからして、資本の論理がつらぬかれるかぎり、科学の正常な発展は期待されえないことになるのである。

そして、研究の成果はそっくり資本に利用される。もともと投資は、その成果を利用するためにおこなわれるのであるから、これは当然のことである。われわれの研究成果は結局のところ全部資本家のものになってゆくのではないか、われわれの技術がそのもうけのためにくみこまれてゆくのではないか、という悩みは、戦後、民主的な若い、とくに自然科学・技術系の科学者からずっとだされてきたのであるが、こうした悩みは今日ますます深刻になってきているといわなければならない。

科学の階級性を考える場合には、さらに、科学の理論のなかにさえも浸透してゆく世界観——階級的に規定された世界観——の問題、科学のイデオロギー性、科学の理論の解釈の問題などを、とりあげなければならない。

(3) 科学研究者をとりまく諸状況とその克服への道

が、いまはそれらの問題には立ち入るいとまがない。とにかく、科学の階級性は、いま述べたように、わが国の現状が資本主義体制であって、資本の論理がいっさいをつらぬいているなかでわれわれの研究もまたすすめられなければならないところに、根ざしている、ということができる。

2

ところで、科学はいうまでもなく、理論的認識、その最も高次な形態であるが、しばしば、「科学のための科学」といったことが標榜されている。ちょうど、本当の芸術は、はじめからなにかの役に立つことをめざすのではなく、自己目的的にいとなまれるものだという意味で「芸術のための芸術」が主張されるのと同様に、科学もほんらい自己目的のものだとされるのである。

しかし、科学的認識というものをと掘りさげて考えてみると、結局、科学は人間の実践と結びつき、これを基礎としているものであることがわかる。エンゲルスが『自然の弁証法』で書いているところによれば、人間を動物から区別するのは、人間が労働するものであると

いう特性である。すなわち、労働の過程で人間は自分を動物から区別し、しかも、労働によって人間はますます自己形成をとげてきたのである。そしてマルクスは、正當にも、労働、つまり物質的な生産労働こそが、人間の歴史をつらぬく基本条件、それなしには人間の日々の生活がただちに不可能となるような基本条件である、とも述べている。いま、実践とか労働とか言ったが、実践は労働よりも広い概念であり、労働、つまり生産労働は実践の基礎的な形態である、といえよう。

ところで、人間を動物から区別する生産労働の基本的特徴を、マルクスは『資本論』のなかで、他の生物、たとえば蜜蜂の営みとの比較によって説明している、蜜蜂は精巧な巣をつくるが、その目的を知ってそうするのではない。目的意識的におこなうのではない。これにたいして、人間の労働は、もちろん、感性的・物質的なものではあるが、同時に、目的を知り、目的意識的におこなわれる。人間は、ものをつくるとき、あらかじめその観念を、つまりいわば青写真をもっているのである。いいかえれば、作らるべきものについて十分な考察をおこない、かれの知識を動員して、青写真をまずつくる、その

うえて、この青写真にあわせて生産に向かうのである。マルクスは、この目的意識的というところに、人間の労働の特質をみているのだが、この目的意識的ということとをさらに考えてみると、そこには、労働の対象と手段との本性、その物質的な性質を認識するということが当然含まれている。原初的な段階においても、ひとはたとえ土を掘るにはどういう物質が都合がよいかを、経験的にあるていど知っている。対象についても、その本性をあるていど知って、その本性に合致するようなしかたで労働するのである。もちろん、その段階では、たとえば火の発見を例にとっても、まだどういう一般原理にもとづいて火が生ずるかには思いつかないで、ただ特定の石と石をすりあわせれば火が生ずるということを経験のなかから知ったにとどまるのであるが、やがて、人類は摩擦によって火が生ずるということを知りようになり、さらに今日ではすでに、エネルギーの転化として摩擦による火の発生を認識するにいたっている。このように事物の本性の認識、その法則性の認識はしだいに深まってゆく。だがいずれにせよ、人間の労働は、原始人の昔から今日にいたるまで、目的意識的な活動であって、その

さい、自然の本性、その法則性をますます深く認識し、その認識した法則性にもとづいてプランをたてて、設定した目的に合うように労働生産物をつくってきたのである。

いま労働について述べたことは、労働をその基礎的な形態とする実践についてももちろんいえるのであって、マルクスも「フォイエルバッハにかなするテーゼ」のなかで、実践のことを、「人間的・感性的な活動」と規定している。「感性的」とは、物質的、つまり対象の物にぶつかること。そして「人間的」とは、とくに目的意識的に対象の法則性を認識し、プランをねって対象に向かうことを意味していると考えることができる。こういうわけで、労働、さらに一般に、実践は、どこまでも感性的、物質的であるとともに、目的意識的、つまり対象の法則性の認識にもとづいて変革をおこなうことである、ということができよう。

3

だが、人類の歴史のなかで、すでに遠い昔に階級的な分裂が生じ、肉体労働と精神労働との分離がおこなわれ

たことは、多くのひとのみとめるところであろう。肉体の苦役は、まず、最初の階級的被抑圧者である奴隷が主としておこない、これに反し、精神的な活動は支配者のもっぱらおこなう事柄となった。肉体労働と精神労働との分離が、それ以来、ますます進行するなかで、前述したように、もともと労働のうちにその不可欠な契機として含まれていた対象の法則性の認識という側面は、もっぱら支配階級がたずさわる仕事となっていた。こうして、理論的認識活動、科学的認識活動の実践にたいするいわば相対的な自立化がおしすすめられていった。すなわち、科学的認識の活動はもともと、労働、実践と不可分なものでありながら、相対的に一応それだけとしていとなまれるものとして派生してきたのである。あるいは、より厳密にいえば、もともと、科学的認識の活動は実践活動の内在的な契機でありながら、相対的に自立化し、その結果、実践活動を媒介するものとなっている、だけれどもやはり結局、実践活動の部分過程であるという基本的な性格は存続しているのである。

だからして、さきに述べた「科学のための科学」という主張は、科学的活動が実践過程から抽象的に分離して

つかまれ、あたかもほんらい自立的、自己目的的なものであるかのようにとらえるところから生じたものである。だが、もともと生産労働から、実践から出発し、それにたかえるということが、たとえどれほど相対的に自立化しているにせよ科学および科学的活動の人間生活のなかでもつ位置であり、そのなかではたす役割である。しかし、実践から出発し実践にたちかえるといっても、肉体労働と精神労働とが分離し、階級社会が発生して以来、階級的刻印をまぬがれた、つまり、さきの言葉でいえば、構成体的特性を負うていないような実践、そのような人間生活はない。そのため、科学的研究は客観的な法則性の認識をめざしてそれを達成するものであるにしても、今日われわれがみるように、その研究自身が、まるごと当の構成体の搾取機構のなかにだきこまれるという側面をもっている、といわなければならない。そこで、この側面を次にもう少し立ち入って考察してみたい。

人間は、生産活動をおこなうためには、相互の関係を結ばなければならない。ロビンソンのような場合を別として、いやその場合でさえも、かれは、孤島にゆくまえには共同生活をしており、そこでの生産関係を基盤にし

てえられた経験、知識を前提してはじめてかれの労働をなしたものであるが、そういう抽象的な想定はともかくとして、人間は相互に生産の関係を結ぶことなしには生産労働をおこなうことはできない。しかし、生産にあたって人間が相互のあいだでとりむすぶこの関係は、階級社会にあつては、生産手段がだれの手中に握られているかによって、その基本的性格が規定される。マルクスとエンゲルスがおこなった劃期的な発見は、こういう生産諸関係が全社会諸関係の基礎をなしていること、前者の基本的な性格が後者の性格を窮極的に決定していることである。今日、ブルジョア社会学では、社会関係は複雑であり、さまざまな要因から成っているとみて、それらの要因の相互関係を研究するにあたって、調査データをもとにした数学的な分析を企てるのであるが、社会の諸側面のあいだの相互関係をたんに相互外在的な数量的な関係とみなす点(現象主義、数学主義)はいま暫くおくとしても、社会関係が複雑で相互に関連しあっていることぐらいは、だれにでも分かることである。マルクスとエンゲルスの功績は、この複雑な相互連関のなかでなにが結局のところ規定的であるかということを、明らかに

したところにある。

生産関係が結局のところ規定的であるといえ、それでは、人間の能動性などをみとめないことになるのかという問いが出されるかもしれないが、いまそのことに詳しくあたっているいまはないにしても、生産関係の規定性はけっして機械論的、ないしは宿命論的なものでなく、複雑な社会諸関係のなかで具体的に多様な屈折をえてはじめてつらぬかれるのであり、社会の存続と発展のなかで人間の能動性は基本的な契機として含まれる。(なぜなら、社会の諸関係はすべて意識、思想、意志をもつ人間の実践の成果であるのだから。)その意味で人間の能動性によって媒介されながら、結局のところ、全社会的諸関係を生産諸関係が合法的に規定してゆくということを、一般的には史的唯物論の基本命題として、特殊的には資本主義社会の経済的運動法則の分析を介して、マルクスは明らかにしたのである。

ところで、一方に生産手段を握っている人間の集団があるとともに、他方には、生産手段をもたない多数の人間の集団があり、かれらは、生産手段をもたないため、衣食住という最低生活の条件をうるためにすら、前者の

支配のもとで生産にたずさわらざるをえない。ところで、生産は、基本的には、自然の対象にぶつかり物質的な手段を用いておこなう人間の活動であり、端的に言えば、人間の自然にたいするこの基本的な関わりを示すものとして、史的唯物論では生産力というカテゴリーが形成される。そして、この生産力の実質的な担い手となるのは、むろん、生産手段をもたないが生産にたずさわらなければならぬ人間集団である。そこで、これら二つの人間集団のあいだの対立が階級闘争となるのであるが、ここには、生産諸関係と生産諸力との矛盾が実現されるわけである。資本主義社会にあつては、この矛盾は、資本家階級と労働諸階級および勤労人民とのあいだの対立というかたちをとって激化しており、冒頭で述べたインフレ、公害問題などを目前の頂点とする差し迫った諸問題は、今日、階級闘争における重要な争点となっている。ではこのなかで、科学研究者の活動はどのように位置づけられるかについて、さらに考察してみよう。

4

さて、資本主義は、今日の国際的・国内的な危機的な

かで、最高の利潤の獲得をめざしながらそれ自身の存立を維持するために、科学的研究の成果をできるかぎり利用しようと躍起になっている。マルクスが前世紀に指摘したように、科学は直接的生産力となるという事態は、ますます促進されている。原子力などの自然科学の成果は、アメリカの原子力潜水艦がわが国の港湾、領海を侵しているように、戦争の道具という破壊力のためにさえも利用されているが、物理学、化学、生物学など、大学や研究所で研究される自然科学のどの分野での研究成果も、資本はこれを利用し、生産力として役立てようとしている。

ところで、そのことが可能なのは、いうまでもなく、自然科学が、それぞれの分野において、対象とする自然の運動諸形態、諸側面の法則性の認識を達成するからである。ところが、自然科学の認識する法則性は、客観的実在としての物質にぞくし、だれしもが承認しなくてはならぬ、しかも、ほんらいだれしもが利用しうるはずのものである。いいかえれば、それはほんらい、万人のもの、人間生活を豊かにするために利用しうる万人のものなのである。しかるに、それがそっくりそのまま資本家

の収奪のなかにくりこまれている。これは何としても矛盾といわなければならない。ここで、自然科学によって獲得される客観的な法則性は万人のものであるべきであるのに、なぜ万人のものにならないかという問題、つまり、資本の支配という基本的な階級性の問題に、ゆきあたらないわけにはいかない。

労働の成果が、資本家の搾取の対象となるのではなしに、労働し勤労する人民大衆の富となるべきであるように、科学の成果もまた、労働し勤労する人民大衆の富を形成する契機とならなければならない。労働者がその労働の成果を自分たちおよび勤労人民一般のものにしなければならぬように、研究者はその成果を自分たち自身のもとにおき、このことを通じて、その成果を労働し勤労する人民全体のものとしなければならない。研究者は、そのことを阻止するものが資本であり、生産関係のもつ矛盾にはかならないことを認識しないではいられない。ところで、生産関係の矛盾をもっとも深刻に自分の生産の現場で日々を経験しているのは労働者であって、だからこそ、研究者は、かれ自身生産の現場にはいないけれども、かれのたずさわる自然の法則性、万人のものであるべき法則性、つまり客観的真理性の名において、しかもそれが万人のものとして利用されるべきであるという本来の要請からして、かれが良心的であればあるほど、労働者階級、勤労人民との結びつき、その連帯の必然性を痛感せざるをえない。いうまでもなく、階級闘争は、各個バラバラにおこなわれるのではなく、社会的な連帯において遂行されなければならない。そこにはどうしても、現実の差し迫った諸問題を、歴史的に総合的にとらえる視点、必然的普遍的にとらえかえす視点がなければならない。しかしまた、民主主義がなければならない。レーニンが『国家と革命』のなかでも言っているように、国家はもちろん階級支配の手段であるが、ブルジョア国家を廃絶するためのたまたかい、すでに歴史的な意義を失い形骸と化したブルジョアの民主主義をうちたおすためのたまたかいは、労働者階級と勤労人民にとって完全な民主主義をうちたてるためのたまたかいであることを、注意しなければならない。

すなわち、資本主義社会の上昇期においては積極的な歴史的な役割を果たしたブルジョアの民主主義はすでにその歴史的意義を失ったばかりでなく、さきにナチズム、

ファシズムにおいて、さらに今日、わが国やアメリカ合衆国(たとえばニクソン政権)の体制においてきわめて顕著にみられるように、すでにその反対物(非民主主義)に転化している。資本家階級は、資本主義の衰退期にはもはや民主主義の旗をかけるどんな力をも喪失してしまっている。今日、うちすてられたその旗をふたたびかかげこれに新しい実質的な内容を盛って発展させるのは、労働者階級と、それを中心とする勤労人民であり、いまや、労働者階級と勤労人民のための民主主義がめざされなければならない。だからして研究者もまた、科学のめざす法則性の認識を軸とし、その客観的真理性の權威のもとに、労働者階級と結びつかざるをえず、そのことは当然、かれがかれ自身で歴史的な総合的な視点を確立し、人民のための民主主義をめざすたにかいに身を投ずることにならざるをえない。

5

以上で述べてきたことをしぼっていえば、科学の階級性には二つの面がある。まず、始めに述べたことによれば、われわれの科学的研究が資本主義体制のなかにだき

こまれてしまっているという側面がある。それと、もう一つ、科学的活動は、この事態に反対し、労働者階級のおこなう階級闘争と連帯するという側面をもっている。前述したように、資本主義社会においては、生産諸力と生産諸関係とのあいだの矛盾は、資本家階級と労働者階級との対立というかたちをとってあらわれるが、科学の階級性もまた、そのことに照応して、対立する二つの側面、すなわち、資本の支配する側面と、労働のこれを否定する側面という、二つの側面をもっている。

次に、科学性とは、科学的活動において法則的認識の側面を表現するものと考えたい。科学という場合、新実証主義では、たとえば力学の教科書にみられるような、一つの体系的にまとまった諸命題の集合とみなされる(唯物論とはちがって、そこでは、対象の反映性是否定される)。しかし、科学というものは、古くはそういう諸命題の集合にとどまるものではなく、科学研究者の活動の全総体がじつは科学なのであって、そのなかから成果としてたとえば論文が書かれ、著作が書かれる。論文や著作に書かれた内容はむろん研究対象の反映であるが、この反映だけが科学なのではなく、そうした成果をうみ

だす研究者の活動の全体が、社会における科学の具体的な内容である。だが、いま科学性といった場合、用語として、対象の法則的反映の側面、したがってまた科学の成果が万人のものであるという側面を表現するものとする。

そこで、階級性と科学性との矛盾、統一について語ることができる。上述した点にもとづけば、階級性と科学性との矛盾は、資本主義体制のなかで科学的活動が資本に全体としてだきこまれていくこと、科学的活動のなかに資本の論理が結局は支配していること、この階級性について、真理は万人のものであるべきであるという科学性が対立する。この矛盾的な対立こそが、前述したように、科学研究者は直接的には生産の場にはいないにもかかわらず、それを労働者階級との連帯におもむかせるところのものである。

だが、階級性と科学性との統一についても語ることができる。とくにそれが顕著であるのは、科学のよってたつ真理の立場こそが、階級闘争をすすめる労働者階級との連帯を強化するところにある。

このように、階級性と科学性とは相互に矛盾し統一し

ているが、これは、基本的には、階級性が、二つの対立的側面の統一であることにもとづいているのは、明らかである。

ここでは、本論の論旨の展開にしたがって、科学研究者のよってたつ科学性の見地から、科学性と階級性との矛盾と統一について語ったが、両者の矛盾と統一は、このようなものにはとどまらない。とくに重要なのは、労働者階級のおこなう階級闘争、つまり政治的・経済的・イデオロギー的な闘争は、客観的法則性の認識を不可欠なものとし、それにもとづいてすすめられなければならないという点である。階級闘争という偉大な人間的実践は、最も高い意味において、客観的な法則性（歴史的普遍的必然性）の認識にもとづく変革だからである。理論と実践との統一という問題の最も重要な点は、まさにここにある。だが、本稿では、残念ながら、この点にまで論述を展開するいとまがない。

6

以上わたくしは、しばしば自然科学を念頭におきながら論をすすめてきたが、自然科学の場合には、その理論

のうちに世界観的なものが浸透していることがあるにしても科学的理論はその核心において対象の法則性の反映であり、したがって、対象の法則性を認識しているかぎりにおいては、その法則性の発見者の社会内での立場や見解がどうであろうと、科学的理論はそれ自身としては階級性の規定をまねがれていってよいだろう。しかし、社会科学の場合には事柄がもっといりくんでくる。

もちろん、自然科学および社会科学というように科学を区分すること自身が問題であろう。たとえば医学についていえば、解剖したり細菌を培養したり聴診器をあてたりすることだけをみれば医学は自然科学のようにみえるかもしれないが、森永砒素ミルクやサリドマイドの事件や、珪肺病を始めとする多くの職業病はもちろんのこと、結核やコレラのような伝染病から神経性疾患にいたるまで、じつは人間の社会生活での問題であり、それゆえ人間の病気を、たんに猿や犬の病気に還元して済ますことはまちがっている。心理学についても、かつて戦後にソ連でそれが自然科学にぞくするのか社会科学にぞくするのかについて論争されたことがあるが、人間の感性や意識それ自身が社会の発展の産物であり、たとえば生物

たとえばねずみや金魚、の刺激反応についての研究が人間の心理の研究になにほどこ役立つことがあるかもしれないにしても、後者を前者に還元することができないのは、いうまでもない。とにかく、自然科学の側面と社会科学の側面とは、とくに医学などでは、複雑にからみあっており、数学やサイバネティクスなどは別として諸個別科学を自然科学と社会科学とに単純に二分するわけにはいかない。もちろん、新カント派などでいわれるように、自然科学的方法と社会科学的方法を截然と二分するような考え方もまちがっている。

最近、自然科学と社会科学との統一、一般的には科学の統一ということがいわれるが、これはしかし、なにかいままでの科学が一举に一つの科学になってしまうということ、だからいままでの諸科学の区分はまちがっているということの意味するものではない。諸科学は、客観的实在の運動諸形態と諸側面を、それらの階層性と歴史性との統一の見地から、それぞれ対象としており、そこにそれらの諸科学の区分と統一との客観的な基礎があるということが出来る。前述したように、諸科学が形成され利用されるのは人間の実践においてであるとしても、

そして実践は諸科学をたんに各個別々に成立させ利用するのではなく、それどころか、人間の社会的実践したいが諸科学の統一を要請するとしても、だからといってこのことは決して、諸科学の専門的な区分それ自身を廃棄するものではない。

自然科学と社会科学との区別と統一についてだ、横道にそれだが、右のことを考慮したうえで、一応自然科学と社会科学とを大まかに区分することにしよう。そして、本論にもとれば、社会科学の場合には、階級性のある方、自然科学とはちがう一つの著しい特徴がみられるといえるだろう。それは、階級社会にあっては、社会科学の対象自身が階級性をもっているということにもとづいている。経済学を例としてあげることができる。

いうまでもなく経済学の対象は経済現象であり、したがって物理学の対象が物理科学的な現象、つまり無機的（生命のない、という意味）自然の現象であるのと同じであるように、経済学においても、つきつめて研究すれば、研究者のだれしもが承認するような法則性が見出されてくるのではないか、と考えられましょう。しかし、周知のように、いわゆる近代経済学とマルクス主義経済

学とのあいだに基本的な対立があり、ここでは、決して、資本主義社会の経済現象について同一の法則性の認識に現に達してもいないし、またそれに達することは将来もあるまいと思われる。

ここでは両者の対立に詳しくたちいるいとまはないが、近代経済学は十九世紀の七〇年代に、労働価値説、剰余価値説に反対して、人間にとっての主観的な価値としての効用、その限界に着目することによって成立したといえよう。そして効用のもつ質的側面を捨象し、量的な表現に専念し、限界を数量的にとりあつかうことによって経済現象を「科学的」に記述しようとしたのである。そこで、近代経済学はマッハ主義と結びついてくる。いやむしろ、マッハ主義を哲学的基礎としていえるべきである。ローザンヌ学派のシュンペーターによると、科学の目的は現象諸量の相互依存関係の記述、つまり関係関係の記述にある。科学が因果性の研究をおこなうというのは時代遅れの考え方であるというのである。これは、マッハ主義の考え方にはかならない。シュンペーターによれば、力学も経済学も均衡体系としては同じものの確立をめざしている。いいかえれば、諸科学は同じ一

(13) 科学研究者をとりまく諸状況とその克服への道

つの均衡体系を見出せばよい。ただそこにあらわれてくる変項や定項をどう解釈するかによって、物理学や経済学などの諸分野に分かれるものとされる。現在、近代経済学をやっているひとでこのように単純に考えるひとはあまりいないかもしれないけれども、量子力学を念頭においてミクロの経済学における波動方程式の研究などということがある。しかし、そのような均衡体系なり微分方程式なりをたてるやり方によっては、あるいはまたもっぱらグラフを書いてトレンドを延長するやり方によっては、決して生産関係における基本矛盾、剰余価値、利潤の発生の原因などの基本問題を究明することはできず、資本や独占の本質を説明することができず、資本家階級と労働者階級との対立の経済的基礎を説明することもできない。したがって、資本主義社会の基本矛盾を掲棄する方向を説明することもできない。

さらに、いわゆる宇野経済学がある。そこでは『資本論』がまず「原理」的に研究されるが、『資本論』のなかで「純粹」と解される諸命題だけをとりだして無矛盾な、したがって永遠に循環する体系がきずきあげられる。この体系が「原理論」と呼ばれるものであるか、この理

論的領域では資本主義成立のための原始的蓄積もなければ、資本主義社会の最後の鐘が鳴るといふこともない。『資本論』にまぎれこんでいるこうしたものは、「原理論」とっては不純なものとして棄てられる。資本主義社会はこうして「原理」的には死滅しない。そこには、資本主義の死滅の弁証法がない。肯定のなかに否定性を洞察する観点がない。マルクスが『資本論』の第二版のあと書きで特徴づけているような、どこまでも現実批判的な否定性、弁証法がない。

その他、法学、国家論、社会学等々の社会諸科学における階級性の問題に個別的にたちいって述べるいとまはないが、そうした諸分野でも、研究対策が階級的であるために、理論内容自身に階級性が基本的に顕現してこざるをえない。このように、社会科学と自然科学とを比べた場合、前者においてはその対象自体が階級対立をもっているために、現存の階級社会を温存し弁護する立場と、これを否定し掲棄する立場との基本的な対立が、理論内容自身のなかに体系的にあらわれてこざるをえない。それゆえに、ここでは、研究者自身のとる立場が、かれ自身の研究の方向、仕方、成果をいやおうなしに規定する

ことになるのである。

哲学についても事情は同様であって、現代の観念論の諸流派としてプラグマティズムとか、新実証主義（分析哲学）とか、実存主義とか、ネオ・トミズムとか、さまざまな立場があることは、周知のことと思う。これらの諸流派にたいし弁証法的唯物論の見地が基本的に対立しており、この対立は、現実の国際的・国内的な対立（社会主義体制と資本主義体制の対立、資本家階級と労働者階級の対立、等）の反映にはかならない。だからして、自然科学の諸分野の場合のように、だれしも同じ「哲学」という学問をやっているのだから、同じ真理性の承認にいたるはずである、ということにはとてもならない。たとえば、特定の宗教的な立場を基礎においてその立場からの思索をおしすすめるかぎり、そのひとは一生かかっても、そのどの論文においても、弁証法的唯物論の基本諸命題を承認するようになるはずがないのである。また、実存主義者は、人間の挫折、不安、賭、無などの、むきだしの非合理主義的な見地をどうしても離れることはできない。

それゆえ、自然科学と社会科学および哲学とにおいて

は、階級性と科学性との矛盾、統一はことなる特徴をもつてこざるをえない。もちろん、基本的には同一のものがつらぬいているけれども、同一のもののつらぬくなかでそのあらわれ方の区別をもやはりみなければならぬ。さらに、社会諸科学のなかでもその諸分野において、むしろ、あらわれ方の区別があるはずであり、また、社会科学と哲学とをたんに一色ぬりつぶして理解するわけにもいかない。

7

さいごに、今日のブルジョア科学における科学の分断と、恣意的な総合にかんして、一言述べておこう。

諸科学の分断、さらにその細部での分断についていえば、それは、諸科学の相互連関、その歴史的・総合的視野を見失った専門屋が多数生じていることに、端的にあらわれているといえよう。専門的な研究家の養成の過程において、大学の学部、マスター、ドクターの各段階で小さきみにたんに小さくうまうまとまった論文を作成することが制度的にいやおうなしに要請されているという点も、研究のタコソボ化、無思想の専門家が生まれる一

つの原因となっている。本稿の始めに述べたような、ただ好きな実験さえできればそれで自分は満足だといったたぐいの自然科学者も少なからず生まれているのである。

他方、諸科学の恣意的な総合もおこなわれている。資本の要求する龐大な生産力のために、その利潤獲得に役立つようなしかたでの諸科学の総合が求められる。わが国でおこなわれている巨大科学の促進などはその顕著な例である。さらに、先般、ロストウが「反共産党宣言」と銘うって独特の社会成長理論を提唱したが、これはつまり反共のための思想の武器の役割をになわせるためであって、それによれば、社会主義は全体主義と同一視され（これは、ライシャワーらの提唱に追隨してわが国でとみに流行した「近代化論」一般に通有の考え方であり、全体主義（社会主義を含む）にたいして自由主義が対置される。すなわち、今日、自民党が宣伝する「自由か独裁か」といったデマゴギーと同質のものである）、全世界は、アメリカのような消費社会、ベビーブームの社会に向かって成長している。社会主義も結局、これに近づいてくる、というのである。ロストウ理論は社会についての恣意的な総合理論のたんに一例にすぎない。史的唯

物論に反対していきなりかわりたちかわりわが国に輸入されてくるこの種の社会理論は、枚挙にいとまがないくらいである。サイバネティックスについていえば、それは自動制御の過程一般を研究する一つの科学であるが、あたかもそれがなにか自然や社会を通じ、さらに人間をも含めて、妥当するところの最も普遍的、基本的な法則を確立する学問——一種の「統一科学」——であるかのように論じられ、すでに史的唯物論などは古くなった、イデオロギーの時代は終焉した、などと称される。だが、このようなイデオロギー終焉論それ自身がはなはだイデオロギー的なものであり、その流行が史的唯物論の見地から説明されうるのである。

いま述べたように科学の寸断にしろ、恣意的な総合にしろ、それによつては科学の正常な発展は期待されない。そこにあるのは科学の跛行的な進行、あるいはむしろ非科学的思想の流行だけである。

以上からわかるように、労働者階級と、それを中心とする勤労人民のおこなう階級闘争と結びつく科学研究者の立場、いいかえれば、階級性と統一した科学性の立場は、つまるところ、弁証法的唯物論の立場にほかならな

い、ということが出来る。弁証法的唯物論は、むきだしの非合理主義である実存主義や、「合理性」「科学性」を外被とするところの、じつは非合理主義であるプラグマティズムや新実証主義（実存主義と、プラグマティズムおよび新実証主義とは、相互補完物である、つまり、片や「科学」、片や「心情」といった具合にである）に反対し、諸科学および科学的活動を、生産的労働、実践のなかからとらえ、諸科学の分化と統合を客観的につかみ、

科学的活動が階級的見地と不可分なものであることを明らかにするのである。

本稿は、京都大学大学院生協議会開催の第一回院生大会（一九七三年十一月二十九日）にさいし「現代の科学者、知識人の思想状況と学問方法（仮題）」と題してわたくしのおこなった記念講演の内容に、字句および文章上で若干の補筆をおこなって、成ったものである。

（一橋大学教授）